

社会人の主体的な学習への取り組み (エンゲージメント) に貢献する持論

○佐藤裕子 今城志保 (リクルートマネジメントソリューションズ 組織行動研究所)

How 'JIRON' is related to learning engagement of adult learner

Hiroko Sato, Shiho Imashiro (Recruit Management Solutions Co., Ltd.)

問題と目的

成果主義を背景とした仕事の個人化や、人生100年時代におけるキャリアの長期化を背景に、社会人が企業に依存することなく、自発的にキャリア形成のための能力開発を行う必要性が高まっている。一方、仕事と直接関係しない学びの活動も、仕事のエンリッチメントをもたらす可能性から (Allis ら, 2008) , 企業によってその重要性が見直されている。しかし、社会人で1年の間に学んだことのある割合は58.4%, そのうち職場の教育・研修は21.5%であり (内閣府2019), 職場を離れて自ら主体的に学ぶ人の割合にはまだ拡大の余地がある。

本研究の著者らは、経験を通じた学びから形成される「持論」の研究を続けており、これまでの経験から仕事場面についてどのような「持論」を持っているか (今城ら, 2016, 2017a), それらの「持論」が新たな仕事への適応をいかに促進するかを検証してきた (今城ら, 2017b, 2018)。これらの研究では、仕事場面における「持論」を「仕事を行う際に活用する、言語化され、価値を置く、自分なりの仕事の進め方やコツ」と定義している。学習場面についても、同様に、自分なりの「持論」があり、それが新たな学習への適応を促進することが予測される。そこで本研究では、主体的な学習を行う社会人が持つ学びに関する「持論」について、探索的に検討した。

近年、児童・生徒の学習活動に関する研究では、

学習への適応や成果を予測する心理変数として、仕事に関するポジティブな心理状態を示すワーク・エンゲージメントの概念から派生した、学びのエンゲージメントの概念が注目されている (戸山, 2018)。櫻井 (2020) は、学びのエンゲージメントは、課題に没頭して取り組んでいる心理状態で、学びへの主体的な取り組み態度のことであるとしている。そして、構成要素として、Skinner (1993) などの先行研究で定義されている「感情的エンゲージメント (興味や楽しさを持って取り組む態度)」「行動的エンゲージメント (注意をむけ粘り強く取り組む態度)」「認知的エンゲージメント (目的や目標をもって自己調整的に取り組む態度)」の3要素に「社会的エンゲージメント (周囲の人と助け合って取り組む態度)」を加え、検討している。本研究では、この学びへの没頭や主体的な取り組みを示すエンゲージメントに対し、

「持論」がどのように貢献するかを明らかにした。

学びの内容としては、前述の社会的必要性を考慮し、ビジネススキルや語学などの仕事に関する領域の学びだけでなく、スポーツや趣味などの文化的な領域の学びも対象とし、対比的に分析した。

検討1: 学びに関する持論の内容にはどのようなものがあるか

検討2: 学びの領域毎にエンゲージメントに影響を与える持論はどのようなものか

方法

調査対象

従業員1000名以上の企業に勤務の20～59歳の正社員のうち、「1年以上にわたり継続的に、自ら興味をもって取り組み、上達したり詳しくなったりしたと感じていること」があると答えた人489名（男性81.2%、管理職30.3%、大卒/大学院卒のみ）を対象に、2020年11月にオンライン調査を実施した。

検討に用いた変数と方法

学びの持論は、「自ら興味をもったことを、継続的に学んだり取り組んだりするために大事だと考えるコツや工夫（持論）」の自由記述で尋ねた。学びのエンゲージメント項目は、社会人の学びに関する確立されたものが見当たらなかったため、櫻井（2020）をもとに作成した。「そのことに取り組むことを楽しんでいる（感情的）」「そのことに関係する情報にはいつも注意を払っている（行動的）」など4要素1項目ずつ（6件法）を尺度化し（ $\alpha=.73$ ）、上位50%を高群（ $M=4.76+$ ）、下位50%を低群（ $M\leq 4.75$ ）とした。学びの内容は自由記述をもとにビジネススキルや語学などの「仕事系」（ $n=209$ ）、スポーツや趣味などの「文化系」、「その他」（ $n=6$ ）に分類した。持論の質

的データを解釈する際には、信頼性・客観性確保のため、KH Coderによる計量的分析を行った。

結果と考察

Figure 1 持論記述の共起ネットワーク分析

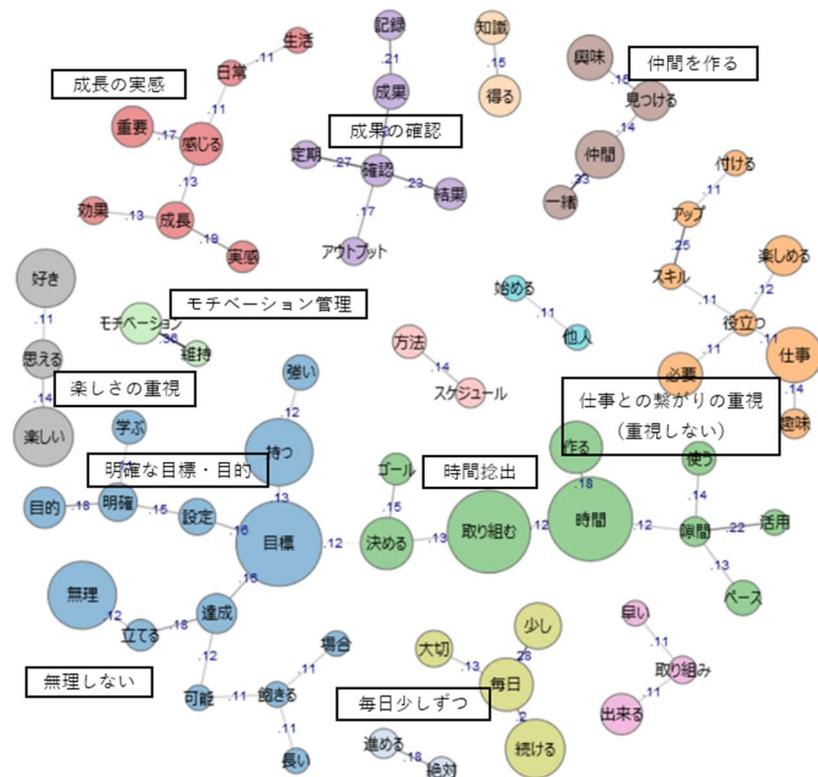


Figure2 主体的に学びを継続するための持論（自由記述）代表例抜粋

| | |
|-------------------------|---|
| 楽しさの重視 | 自身が好きと思える内容を突き詰めていくこと。/ 自分にとって興味があり、やってみて楽しい事を選ぶ。楽しくないなら違うものを探すべき。 |
| 仕事とのつながり 予の重視（重視しない） | 仕事が必要だったり、積み重ねが誰かの役にたっている実感を得られること。/ 何が仕事に繋がるのか考えると継続しやすい。/ 仕事に必要だからとかスキルアップに役立ちそうという動機だけで長続きさせるのは難しい。周囲が始めているからといった理由などなんとなく取り組むのではなく、自分が何をやりたいのかしっかりと目的を明確にして取り組む。/ 常に目標を持って可能であれば同じような事で成功した人を頭に入れて取り組む。 |
| 時間捻出 | 朝のちょっとした時間を利用するなど、自分で時間を確保する。/ 時間ができたらするのではなく自ら時間を作るような気構えが必要。 |
| モチベーション管理 | モチベーションを維持するために、常に自分が知らない何かに関心を持つ。/ こうしたらやる気が出る、というシチュエーションを把握して再現できるようにする。 |
| 同行 仲間を作る | 一緒に頑張れる仲間を見つける。/ 一緒に苦しみを分かち合いフィードバックしてくれる仲間や、的確なアドバイスをしてくれるコーチの存在 / 共通の話題が出来て和気あいあいと学べる仲間がいると継続する。 |
| 無理しない | 自分のペースですすめること。無理はしない。/ 目標が達成出来なくても、焦ったりせず、自分のペースで無理なく進めること。 |
| 毎日少しずつ | 毎日取り組んで習慣化すること。/ 少しでもいいから、毎日継続してやること。目に見える成果の形でアウトプットを確認できることが大事。/ 取り組んだことの結果を記録につけて定期的に成果を確認する。/ 定期的に試験を受けるなど、ある程度の知識が身についているか客観的に確認する。 |
| 省察 成果の確認 | 成長や効果を感じて、自分がやってきたことに自信が持てること。/ 指導者に褒められるなど成長が実感できること。 |

持論の内容

Figure1は、学びの持論に含まれる単語を用いた共起ネットワーク分析の結果である。円の大き

きさは各単語の出現頻度に対応し、共起関係の上位60までを線で示している(数値はJaccard係数)。この結果から、出現頻度の高い持論として、10のカテゴリーを抽出した。各カテゴリーの代表的な記述例はFigure2のとおりである。

抽出された持論はそれぞれ、自己調整学習理論の3段階プロセス(Zimmerman, 2011)に照らして整理することができた。3段階のプロセスは「予見(目標設定, 方略の計画, 自己効力感, 興味)」「遂行(注意の焦点化, 自己教示, 自己モニタリング)」「省察(自己評価, 原因帰属, 自己反省, 適応)」で、これらは循環的サイクルとされる。

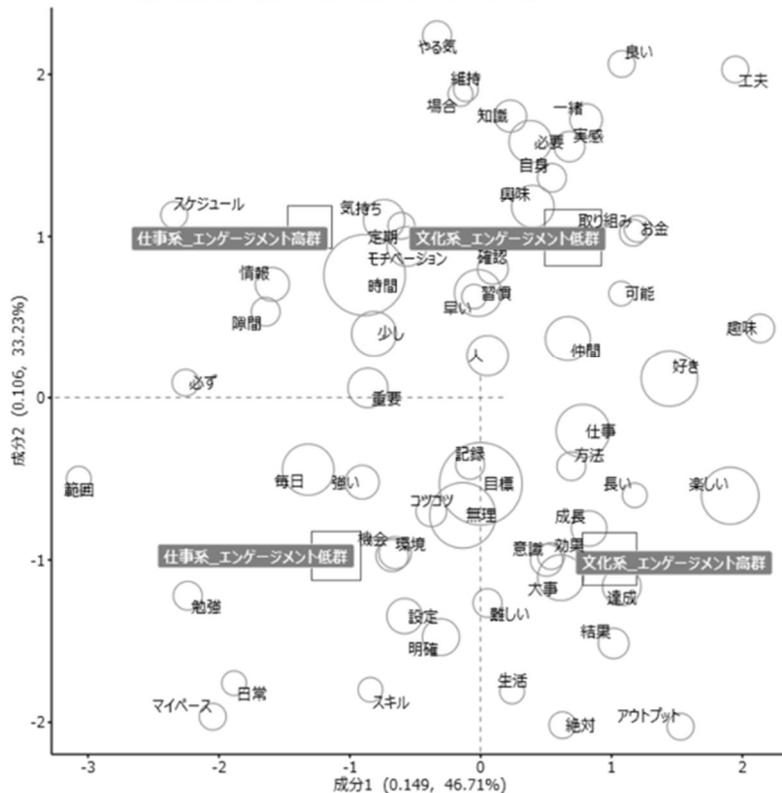
10の持論のうち、「楽しさの重視」「仕事とのつながりの重視(重視しない)」「明確な目標・目的」は予見段階、「時間捻出」「モチベーション管理」「仲間を作る」「無理しない」「毎日少しずつ」は遂行段階、「成果の確認」「成長の実感」は遂行段階に関する持論とだと考えられ、3つそれぞれの段階について、関連する学びの持論が見られた。

エンゲージメントに影響を与える持論

学びのエンゲージメントに影響を与える持論を検討したのがFigure3である。学びの内容が「仕事系」「文化系」か、学びのエンゲージメントが「高群」「低群」かにより、「仕事系_エンゲージメント高群」「仕事系_エンゲージメント低群」「文化系_エンゲージメント高群」「文化系_エンゲージメント低群」の4群を作成し

| 群 | N | MEAN | SD |
|----------------|-----|------|-----|
| 仕事系_エンゲージメント高群 | 85 | 5.41 | .39 |
| 仕事系_エンゲージメント低群 | 124 | 4.00 | .49 |
| 文化系_エンゲージメント高群 | 118 | 5.37 | .34 |
| 文化系_エンゲージメント低群 | 156 | 4.08 | .58 |

Figure 3 持論記述の対応分析
(累積決定係数25.5%, 寄与率79.94%)



エンゲージメント高群」「文化系_エンゲージメント低群」の4群を作成し (Table1), 各群と持論の対応分析を行った。対応分析では、出現パターンに取り立てて特徴のない語が原点の付近にプロットされる。グレーで示した各群のラベルの方向にプロットされ、原点から離れている語ほど、その群を特徴づける語だと解釈される。なお対応分析では軸の解釈は必ずしも必要ない(樋口, 2019)。

分析の結果、仕事系の学びのエンゲージメント高群に特徴的に見られる語としては、「スケジュール」「隙間」「時間」という「時間捻出」の持論に関するものや「モチベーション」「気持ち」という「モチベーション管理」の持論に関するものが確認された。また、文化系の学びのエンゲージメント高群では、「楽しい」「好き」という「楽しさの重視」の持論や、「アウトプット」「結果」「効果」「成長」という「成果の確認」「成長の実感」の持論に関するものが見られ、領域ごとに異なる持論がエンゲージメントの高さと関係していることがわかった。

一方、仕事系のエンゲージメント低群には、「マイペース」「日常」という語が確認された。「無理をしない」や「毎日少しずつ」の持論に関するものである。これらはやや受動的な持論であり、仕事系の学びの継続にはよい影響を与えるとしてもエンゲージメントの高さに貢献しないことが示唆される。

文化系のエンゲージメント低群の方向に見られる、「一緒」は「仲間と見つける」の持論に関するものである。松本（2019）は、自己調整は一般に自己に完結するものと捉えられがちだが仲間やコーチへの援助要請のような社会的学習を含むとされていることを指摘し、その重要性を論じているが、今回の結果では、社会人の文化系の学びにおいて必ずしもエンゲージメントに関係しない可能性が示された。実際の持論の記述には、「フィードバックをしあう仲間が必要」というような相互教授や協調学習を示すようなものだけでなく、「和気あいあいと学べる仲間がいれば継続できる」のようなやや依存的なものが多く見られたことが影響しているかもしれない。

以上、仕事系、文化系の各学びの領域ごとに異なる持論が、エンゲージメントの高低に影響を与えることが確認できた。辰野（1997）は、自発的な学びにおいては、学習者が、課題が要求するものや自らの特性を理解し、学習目的の達成に役立つ学習方略を選択していく必要があり、これまでの学習経験がその選択に影響を与えるとしている。仕事系の学びと文化系の学びでは、課題の特性も学習動機も異なると考えられ、エンゲージメント高群の学習者においては、それぞれの領域で学ぶ経験を通して、各領域の学びに役立つ持論を形成したと考えられる。低群の持論傾向からは、各領域の学び方を選択するときに留意すべきことについて示唆を得ることができた。

限界と今後

過去の学習経験から、課題や自身の特性にあった持論を形成するプロセスについては、別途詳細な検討が必要である。

また、持論について、自己調整学習の3段階が循環的なサイクルであることを考えると、このサイクルを意識的に遂行していることが、エンゲージメントに影響する可能性がある。インターネット調査の自由記述では、いくつかある工夫のうちの最も重視するものを中心に記述することになるため、インタビュー調査などによる補足的な検討が望まれる。

自己調整学習の理論は、近年、学校教育や教材教育の場面にとどまらず、さまざまな領域の自律的・能動的な学習の研究に展開されている（中谷ら，2019）。会社や学校からの強制力がないうちで行う社会人の主体的な学びも、自らの認知や行動を能動的にコントロールする自己調整が求められる学びである。社会人の主体的な学びを促進するヒントを得るため、学びの持論が自己調整学習のプロセスのなかで果たす役割について、今後さらに検討したい。

引用文献

- Allis, P., & O'Driscoll, M. (2008). Positive effects of nonwork-to-work facilitation on well-being in work, family and personal domains. *Journal of Managerial Psychology*.
- 樋口耕一 (2019). 計量テキスト分析における対応分析の活用—同時布置の仕組みと読み取り方を中心に. *コンピュータ & エデュケーション*, 47, 18-24.
- 今城志保・藤村直子・佐藤裕子 (2016). 中堅ホワイトカラーの「持論」に関する探索的研究. *産業・組織心理学会年次大会発表論文集*.
- 今城志保・藤村直子・佐藤裕子 (2017a). 中堅ホワイトカラーの「持論」に関する探索的研究2. *産業・組織心理学会年次大会発表論文集*.
- 今城志保・藤村直子・佐藤裕子 (2017b). ホワイトカラーの持論と学習行動が適応感に及ぼす影響. *日本心理学会第81回大会発表論文集*(pp. 1B-097).
- 今城志保・藤村直子・佐藤裕子 (2018). 「持論」の性質の違いが適応に及ぼす影響. *産業・組織心理学会年次大会発表論文集*.
- 松本雄一 (2019). 自己調整学習理論と実践共同体. *商学論究*, 66(3), 349-383.
- 内閣府 (2019). 平成30年度生涯学習に関する世論調査.
- 中谷素之・岡田涼・犬塚美輪・細矢智寛・石川奈保子・藤田勉・松山泰 (2019). 自己調整学習研究の多様な展開—教育方法学・教育工学・スポーツ科学・医学教育との対話. *日本教育心理学第61回総会発表論文集*.
- 櫻井茂男 (2020). 学びの「エンゲージメント」. 図書文化.
- Skinner, E. A., & Belmont, M. J. (1993). Motivation in the classroom: Reciprocal effects of teacher behavior and student engagement across the school year. *Journal of educational psychology*, 85(4), 571.
- 辰野千壽 (1997). 学習方略の心理学—賢い学習者の育て方. 図書文化.
- 外山美樹 (2018). エンゲージメントと課題パフォーマンスの関係—エンゲージメント尺度を作成して. *日本教育心理学第60回総会発表論文集*, (pp. 349-383).
- Zimmerman, B. J., & Schunk, D. H. (Eds.). (2011). *Handbook of self-regulation of learning and performance*. Routledge/Taylor & Francis Group. (塚野州一・伊藤崇達監訳 (2014). 『自己調整学習ハンドブック』 北大路書房).